



**WE  
ARE  
SUPER  
RAT**

*Chin  
Down*

分断している世界をつなげたい。現代アートをみんなのものにしたい

# エリイ Chim ↑ Pom

Text by Yuko Ueda  
Photograph by Naoki Ishizaka



# 私、人生が全部アートなんで

渋谷駅に設置されている岡本太郎の壁画に原発の絵を付け足した「LEVEL 7 feat. 明日の神話」、広島上空に飛行機雲で「ピカッ」の文字を描いた「ヒロシマの空をピカッとさせる」など、常にアートをもちて社会に問いかけを行ってきたアーティスト集団「Chim↑Pom」。世の中の虚を突くような表現は、話題を呼び、時に波紋も呼び、人々を立ち止ませ、考えさせるに至る。そこにある、彼らの真意とは何なのか。自身の結婚式までをアートにしてしまった紅一点メンバーであるエリイの、アートと社会への視点を探る。

「異端」とは、よく言われますか？

「いや、生まれて初めて言われました。でもよく、〇〇界の異端児。みたいな特集組まれたりするじゃないですか。天ぶら業界の異端児！みたいな。いい感じじゃないですか。まあでも、天ぶら屋さんとかがいいと思うな、やっぱり」

「えーと、「異端」という言葉は、言い方を変えれば珍しいとかほかになかった意味にもなると思うんですが、よく言われるようにエリイさん自身がギャルであるということが、そもそもアート界では珍しいことですよ」

「そんなことないんじゃないですか。私、顔立ちがちよつとギャルっぽいだけで」

「そうですか？ あの、アートっぽいルックスってあるじゃないですか」

「ありますね。何かちよつと……麻でできてるみたいな？ くだつとした素材のあの感じ？ 私、ああいうの似合わないですよ」

「ギャルついでるんですか、美大とかには。」「予備校の時とかいきましたよ。ギャルで美術やってる子はたくさんいます。でも私、ほかの美術業界の子とか知らないんですよ。だからわかんないですけど」

「同期のいわゆる横のつながりの人というのはいるんですか？」

「ああ、大学の同級生とかすごい仲良しで。同じ無人島プロダクションにいる加藤翼くんは、武蔵美（武蔵野美術大学）の同級生で、同じアパートに住んでました」

「へえー」

「大学生の頃、グランドールコスモっていう同じアパートに総勢11人で住んでいて。4階建ての超ポロニアアパートの、2階と3階と4階に全部友達を呼んで住んで、もう4軒隣まで友達みたいな」

「エリイさんは、学部はどこだったんですか？」「私は、武蔵美の視覚伝達デザイン学科っていうところ」

「すると、卒業後の就職先は広告のデザイン会社とかそういう感じですか？」

「そう。みんな電通とか博報堂とか行きますよね。でも、グランドールコスモの11人中、1人くらいしかいなかったんですよ。就活をしたのは。さっきの加藤翼も、油絵科はあんまり就職は考えてないみたいな感じで。私も……就職の仕方がまづわかんなくて。ぜんぜん、用紙に記入とかすることができず」

「はい(笑)」

「何年に中学卒業して、何年に高校卒業してとかいうのが、まったく紙に書き込めず……よくわからないまま、卒業しました」

「じゃあ、在学中には何者になるかというイメージとかはぜんぜん？」

「大学3年生の時に、Chim↑Pomを結成したんです。1年間やって、作家デビューしました。無人島プロダクションで展覧会をやったんですけど、その時の作品が「スーパー☆ラット」で……で、今です。これを仕事にする、仕事にしないとか、そういうことはあんまり考えてなかったです」

「そうして、もう今年で9年？」「そうですね。ずっとChim↑Pom」

「じゃあ、あのデビューの頃、周りの学校の子たちはうらやましかったんじゃないかなあと、お話を聞いた今思いました。」「どういことですか？」

「いや、きつとすごく注目を集めたと思いますから。作家として歩き出るといっつか。」「いやもう、在学中はほんとに学年最下位で。学校の先生にも、夏休み後の課題を出したら「お前は死ぬ」「みたいな感じでした」

「(笑)」

「そのまま監獄に行け」「退学しろ」みたいなことを、同級生100人くらいの前で言われたりして。だからぜんぜん誰も、まったくミミも私をうらやましいと思ったことはないと思います」

「そうですか(笑)。その頃、そういう自分と周囲というものをしながら、考えていたことは何かありますか？」

「その頃考えてたのは……私は六本木でずっと遊んで。幼なじみがずっと水商売やって、スナックのママやったりとか。それで私はクラブ行ったりスナック行ったりしてんですけど、みんな知らないんですよ。アートのことを」

「はい」

「世界が分断するんですよ。グランドールコスモに住んでる友達とはアートの話できるけど、六本木の友達とはぜんぜんできない。ぜんぜん、世界が違うから。そうすると、なんでこんなに世界が分断してるんだらうっていうことをすごく考え……この分断された世界をつなげたいと思いました。つなげたいっていうか、現代アートをもちとみんなのものにしたいっていうことを、すごく考えました。だから、それはいい経験になりましたね」

「その、アートの世界と、アートじゃない世界をつなぐというか、アートの外の世界にも向けて作品を発信するっていうことは、Chim↑Pomが買ってきているんですか？」

「そうですね。私、やっぱり社会が好きなんです。社会への介入が、子供の時からすごい好きで。ベンチの裏に貼ってある電話番号とかに電話したりするの、めっちゃ好きで」

「テレクラの？」「そう、テレクラとかにかける子供でした。とにかく、社会のすき間産業とか、疑問点みたいなことにすごい興味があった。それはたぶん、ずっと小さい時からやり続けていることなんです」

「確かに、Chim↑Pomの連の活動を見ると、どれも社会の動きに対する反応を提示している感じですよ」

「そうですね」

「Chim↑Pomの著書の『芸術実行犯』の中でも、「応える」ことが大事」という。「そのとき何をしたらか後で問われる」という部分に、すごく感動したんです」

「あれはうちのリーダー（卯城竜太）の言葉です。リーダーがすごく優秀で、天才なんです。リーダーなくしてChim↑Pomなしというか」

「もうひとつグッと来たのは、「人間は覚悟した分だけしか手に入れられないし、提供することもできない」というところ」

「あれ、マンガに書いてあったの」

「『ジョジョ』の『奇妙な冒険』ですよ」

「そう」

「でもあれは、ギャラリーの中だけで完結せず、社会へ実際に介入して活動するChim↑Pomならではの言葉だと思いました」

「でも、ほんとそう思うんですよ。覚悟したぶんだけしか進まないんですよ。ただ、覚悟するとその3倍くらいに伸びる可能性がある。覚悟しないと何も起きないけど、したらその3倍伸びる可能性があるから、そっちのほうがラッキーなんです。覚悟をしないよりリスクヘッジもできるし、伸びしろが多いほうが面白いなっていう」

「意外とほかにはないですよ、こういうアート集団って。アイデア出しは、どういっつかう？」

「そうですね。私、やっぱり社会が好きなんです。社会への介入が、子供の時からすごい好きで。ベンチの裏に貼ってある電話番号とかに電話したりするの、めっちゃ好きで」

「テレクラの？」「そう、テレクラとかにかける子供でした。とにかく、社会のすき間産業とか、疑問点みたいなことにすごい興味があった。それはたぶん、ずっと小さい時からやり続けていることなんです」

「Chim↑Pom会議があるんですけど、週に3回くらい。私は飲みすぎて飛ばすことが多い」

「そうして9年って、バンドだつてそんなに続けるのはなかなか難しいと思います。」

「うちのメンバーたちは、ほんとそれぞれが逸材なんです。だからだと思えますね。みんな芸術に対する志が高いところが、結構大事で。誰かひとりでも低いと、足を引っ張っちゃうじゃないですか。その志の高さと、上を目指している芸術が好きだつてところなんじゃないですかね」

「芸術に対する志というのは、エリイさんの場合で言いますと？」

「やっぱり、私は人生が全部アートなんで」

「確かに、先日の結婚式もプロジェクト化されていますよね。なぜ、結婚式のパレードがデモ行進になったんですか？」

「結婚とは社会的な行為であるということからなんです。普通に同棲したりつき合つてればいいのに、なぜ法的にパブリックにするのかという。個人の幸せと社会はいつも微妙な関係で。だからパレードよりもデモとして警官に監視されるようなブレッシヤアが、個人を祝うみたいイベントだからこそ逆にリアルだと思つた。人間というか日本は日常生活が見張られているんですよ、警察など」

「それと結婚がつかつて？」

「そう。みんなに見守られながら一緒になつて歩き体験を共有するっていう」

「行進では、何かの主張を叫びながら？」

「いや、「二次会はすしでいっしょ」とか」

「(笑)。本の中には、「日本はアートで言つたら後進国」という言葉もありましたよね。そこについて、改めて意見を伺いたいですか？」

「もう言うまでもなく、とにかくアートが何なのかすらわかっていないっていうところですね。言つてみれば、外国ですべてに石畳ができてるところに、日本はまだ枝で火をつけてるっていうか、火もつけられないみたい。ただ、伝統工芸とかは、日本つてすごく強いと思うんですよ」

はい。

「着物とか織物とか、ああいうものは強いと思うんです。でも、考えとかコンセプトを形にするもの？ それを本場に弱いなと思つていて。それは、和をもつて、とする日本のいいところでもあるんだけど。あまり自分の考えを持たず、みんながいいと言っているのいい、みたいな。だから、大概の人がやっていることは、合っているし、そして間違っている」

「それが日本人だと思うんですよ。だから日本の土壌には合っていないでしょうね、たつた今のは。でも、すごく自由な国だと思つてますよ。世論とか警察がどうとか、めんどくさいところもあるけど、表現したりものを創つたりするのは、すごくやりやすい国だと思つてます。だからChim↑Pomは今でも、世界でいちばん面白いアーティスト集団だと思つてます。外国人にもすこいびつくりされるし。こんなに作品数もあつて面白いことやつてるんだ。つて。それができる土壌がある東京っていうのはやっぱり面白いし、だから私は好きなんです。だけどそれを発表する場所がないっていうのと、受け止める知識がある人がいないっていうところが、後進国なんです」

「知識というか、感性というか。」

「そう。何もかも追いついてないし、まず考え方の根本がちよつと違うのかも知れないですね。さつき言つたような、日本人のいたい合つてほしい間違つて性格には、一個人の意見をはつきりと持つていうことが難しいのかも。……でも、面白いんですけどね。カルチャーとしては、日本つてすこい面白いと思つてますよ」

「そうですね。」

「だから、カルチャーがある人となない人の差が激しすぎる。見るとそう思う。でも、カルチャーなんかぜんぜんわかんないよつて言つても、いい意味で突き抜ける人は、すべてを理解する瞬間があつたりします……いっしょ、Chim↑Pomを手伝ってくれる人には何かで突き抜ける人が多いんですよ。Chim↑Pomのことをまったく知ら

なくても、何をやりたいのか、どういうポイントでここまで行きたいから自分に声をかけてるのかつていうこととかを、きちんと理解してくれて。そういう、突き抜けてやりきっている人の共有感具合つていうのは、凄いですね。説明しなくてもわかるっていうか。いくら説明しても、わかんない人にはわかんないし」

「その、わかる人、わからない人の差別なく作品を響かせたいと思つてますか？」

「響かせたいとは、実はぜんぜん思つてなくて……。響く／響かない、いい／悪いとか。よく「Chim↑Pomを支持します」とか言われたりするんですけど、そういうのまったく意味がわからないかと思うし。現代美術つて、現代を生きている人と同じ空間を共有できるじゃないですか。そこが面白いと私は思つて。作品や映像とかで後から見ることはできたとしても、同じ空気を体感できることが現代美術のいいところだと思つてるんで、それをみんなに共有していききたいなっていう気持ちがありますね」

「その、共有というのが活動のいちばんのポイントですか？ つまり、作品を作つて発表するのは大変なことですよ。お金もかかるし、内容によっては「LEVEL 7 feat.明日の神話」の時のように、意図しない方向でニュースにされてしまうこともある。それでもやるという、その活動は何によつて報われるのかということが知りたかつたんです。」

「報われる……報われるね。私、結婚式とかほんとかやる気なかつたんですけど、やるならみんなと共有したかつたし、みんなが本心に楽しそうだったので、それをちゃんとクリエイティブに残すつていうことが、報われることですね。「みんなすこい楽しそう、よかつた」もそうですし、形にして残すこと。個人的なことはどうでもいって感じ。やっぱり私、クリエイティブなことが好きなんだと思つてますよ。発展性があることとか……発展性がない無駄な時間も、すこい好きですよ」

「作品制作の動機が個人的ではないというか、自分のことを理解してほしいといったことではな

く、「みんな」という感じなんです。」

「そうですね」

「パブリックな姿勢というか。」

「パブリックは、個人につながつてると思つてますよね。個人もパブリックにつながつていける」

「ほう。」

「私のこの性格や容姿が形成されたのも、渋谷という街で育つたからだと思いますし。それをまた還元しているんですよ」

「パブリックから受けたものを、また外へ。」

「ええ。個人的な感情とかがあつたとしても、それもやっぱり、パブリックから影響を受けていると思つてますよ。例えば、アマゾンとかに生まれて育つたら、まったく性格や考え方も違つてたと思うし」

「じゃあ、エリイさんが今、パブリックたる世の中において、気になつていいることは？」

「気になつていいること……オリンピックを東京で開催しないべきだと思つていいる」

「おお。それはどうして？」

「まず、東京でやる意味がない。日本でやるにしても、東京にはただでさえ人がいっぱいいるんだから、もつとほかの広い土地とか、過疎が進んでるところとかのほうが日本の良さみたいなものつてすこいあると思うし、アピールできるから。もう誰かが何かの陰謀というか、押しつけとしか言いようがないっていうか、あのオリンピック。でもあれ、私は開催されないと思つてます(笑)。7年後の東京では」

## ELLIE

エリイ ○ アーティスト集団「Chim↑Pom」のメンバー。現代社会に全力で介入した強い社会的メッセージを持つ作品で知られ、世界中で活躍するChim↑Pomのミュージック。3月上旬には、エリイ1st写真集「エレクトリカルパレード」で満足を満たした事はない(Chim↑Pom監修)が朝日出版社より刊行予定。また写真集出版記念展として2月15日から3月15日までhiromiyoshii六本木にて、Chim↑Pom展「エレクトリカルパレード」が満足を満たした事はないが開催される。http://chimpom.jp



撮影=福山紀信